入選

心と心

山形県　山形大学附属小学校　五年
斎藤　拓

朝が苦手な５年生のぼく。お母さんの「早くして」の目覚まし声に、正直うんざり。言葉にしてはいけない心の声。　今日も、いつもと同じバスに乗り、学校へ。まどから外を見ながら、遊ぶ事を考えていた。

間もなく学校だ。今日は、友達とドッジボールをしよう、と決めたぞ。と考えているときに、大きなお兄さんたちの学校の近くの信号が、赤になって止まった。

「あっ！」

目をあけられるだけ開けた。車が通る道路の真ん中に、茶色の物が落ちていた。「ごみ捨てんなよ」と心の中で思っていたら、体の大きい３人組のお兄さんたちが、自転車をおりて、

「ねこー、ねこー！」

と、ぼくのバスの中にも聞こえるくらいの声で、さけんでいるのが聞こえてきた。ぼくの心は、ドキドキ。リズムがスピードアップ。お兄さんたちは自転車をおりて、すぐにカバンの中からタオルを出した。そして、それをねこの体にかけて、道路のはじにひっぱって、ねこをだっこした。

そこで、ぼくのバスは青信号。発車した。

「えっ、どうなったの？」心ぞうの音は、なりっぱなし。

「生きているの、死んだの、どっち？」くり返しのもやもや。学校に着いた。「おはよう」の友達の声で、もやもやの心から、ヒャッホー遊ぶぞ！の心に切り替わって、いつものぼくのペースの学校生活に。

今日の朝のできごとを思い出したのは、ふとんに入って、まくらにまいてあるタオルを見たときだった。

「学校に持っていったタオルに、血がついていたらどうする？」

「えっ、鼻血？けんか？」と、お母さんは心配した顔になった。

「おこる？」

「はぁー、どういうこと？」と、言われたので、朝の道路のねこの話をした。

話をしていると、なぜかギューっと心がつかまれて、泣きそうになった。あくびをして、このなみだは、眠いからだ。ごまかそう。

「すごいね。お兄さんたち。」ぼそっと、お母さんがつぶやいて、

「お兄さんたちに助けてもらったねこは、生きていたら、命を続けられたね。悲しい気持ちになるけれど、死んでいたら、今日の夜からお兄さんたちに、ありがとうと、ねこ星になって光って伝えているね。」

お母さんの話に、めずらしくジーンとしてホッとした。

どんなことにも、どんなものにも、「ありがとう」の心があるんだ。

お兄さんたちのやさしい心が、言葉にしなくても、伝えられなくても、心と心はつながっている。人間だけでなく、すべてのものとの、つながりがあるということをお兄さんたちに教えてもらい、ぼくもまっすぐな、心と心がつながる人になりたい、と思った。